

「みぎての左甚五郎2」プロット

I. プロット

1. 一睨蛙合戦(ひとにらみかわずがっせん)

- (1) 中山道の茶屋から出てきた甚五郎と伊蔵。「やっぱり、この辺りにいるようですね」「それなら巽屋の嘉兵衛さんを訪ねてみよう。きっと力になってくれるはず」
「左手のない女」を見たという噂が中山道沿いから何件か流れてきたことから、甚五郎と伊蔵は聞き込みをしながら高崎宿まで来ていた。高崎には政五郎親方が長年懇意にしている材木屋「巽屋」がある。甚五郎も良材を優先して融通してくれる巽屋を信頼しており、かつて主人の嘉兵衛が江戸に来た時、甚五郎は商売繁盛をもたらす縁起物の三本足の蟾蜍(ひきがえる)の像を贈っていた。
- (2) ところが、二人が巽屋を訪ねてみると、門の前の材木置き場はがらんとしており、ほとんど材木が置かれていない。残り少ない材木が荷車で運び出されようとしているのを見て伊蔵と甚五郎は止めに入るが、人夫たちを指揮する男は「借財のかたに差し押さえたものだ、邪魔するな」とそっけない。材木は巽屋の向かい側にある材木屋「河津屋」に運びこまれていったが、荷車を止めようとしてきた甚五郎は、そこで河津屋の店先に、巽屋に贈ったはずの蟾蜍(ひきがえる)の像が飾られているのを見て愕然とする。
- (3) そこに河津屋の主人、平六が出てきたので、甚五郎は蟾蜍の像を返せと迫る。平六はふてぶてしい顔で「巽屋さんは本丸御殿の改築の時に、虫食いの材を藩主様に献上して信用を失った。店が傾いたのも自業自得だ」と言い張る。甚五郎たちが揉めていると「騒がしいぞ、いかがしたか」と立派な身なりをした侍が出てきた。平六はすぐに平伏し「ご家老の鹿田谷将監さまじゃ！ 控えおろう！」と甚五郎と伊蔵に平伏を迫る。鹿田谷将監は居丈高に「かの巽屋は実に不届き者ゆえ所払いとすべきところ、情けをかけてやったのじゃ。店が傾くのも当然のこと」と言って、わが裁定を愚弄するかと甚五郎と伊蔵を罵倒する。平六は「貴様に邪魔されたせいで、今日中に丸太を全部運び出そうと思ったが終わらなんだわ」と2人に毒づく。
- (4) 河津屋を出た甚五郎は、「巽屋の嘉兵衛さんは手堅い商売をするお人だ。そんな、虫食いの材を献上するなんてタチの悪いへまをするとは思えねえ」と不審がり、巽屋に向かう。そこには憔悴しきった顔の嘉兵衛がいた。
嘉兵衛が語った事情によると、鹿田谷将監は出世欲の塊のような男で、上役にごまを挿り、河津屋から秘かに受け取った裏金をばらまくことで、二か月前に末席家老職にのし上がったのだという。家老就任以来、鹿田谷将監は河津屋に露骨に肩入れし、それまで高崎で一番の材木屋だった巽屋を陥れようと嫌がらせをするようになった。そして、ついには虫食いの材を献上したという事件を捏造して所払いを命じた。河津屋以外の材木屋たちが揃って

嘆願したことで所払いは逃れたが、巽屋は多くの商いから外されて借金がかさみ、嘉兵衛は店を畳もうとしていた。

- (5)「どうします、甚五郎さん？」伊蔵の問いかけに、甚五郎は「高崎藩といえば、藩主はたしか安藤伊勢だったか」と嘉兵衛に尋ねる。そして「さっき丸太を一本だけ、河津屋に奪われるのを防いだよな。あれを三両で売ってくれ。あと、納屋を貸してくれねえか、嘉兵衛さん」と言って伊蔵と納屋に籠って彫り物をはじめめる。
- (6)五日後、納屋から出てきた二人は見事な白蛇の像を彫り上げていた。「蟾蜍の像は奪われちゃったから、改めてこいつを嘉兵衛さんに贈る。店先に飾って『左甚五郎が彫った白蛇の像だ』って大々的に触れ回るんだ」「そんな、先生の名を触れ回るなんて、はしたないことです。蟾蜍の像だって、先生の作だとは誰にも言いふらしておりませんのに」「いいんだ。今回はそうしてくれねえとこっちも困る」
- (7)嘉兵衛が左甚五郎作と銘打って白蛇の像を店頭で飾ると、すぐに評判になって見物人がたくさん現れた。そして翌朝、白蛇に恐れをなした蟾蜍の像が忽然と河津屋の店頭から姿を消す。鹿田谷将監と河津屋平六が「蟾蜍の像を盗んだな」と巽屋に詰め寄り、甚五郎が「蛙だから蛇に恐れをなして逃げただけだ」と言い争っていると、そこに高崎藩主の安藤伊勢守(重長・26歳)の駕籠がやってくる。鹿田谷将監は途端に真っ青になる。「殿さまがなぜこんなところに？」
- (8)実は、安藤伊勢守は甚五郎のよき後援者で、以前から昵懇の仲であった。甚五郎が殿様と親しげに話しているのを見て、鹿田谷将監は掌を返したように甚五郎に媚びを売る。甚五郎が「巽屋さんは確かな仕事をする方だが、虫食いの材を献上しちまったみてえで」と言って安藤伊勢守に巽屋のことを取りなす。安藤伊勢守は事情を察して鹿田谷将監を叱りつけ、もう一度その事件を詮議し直すことを厳命する。巽屋に借財を負わせてしまったことを申し訳なさそうにしている安藤伊勢守を見て、甚五郎は「ならばお殿様、この白蛇の像を二百両でお買い上げいただけませんか」と持ちかける。
- (9)白蛇の像の代金二百両で巽屋は借金を返し、当座の商売の元手も確保することができた。藩主の手前、鹿田谷将監はもう巽屋をいじめることはできない。白蛇の像が高崎城に運び出された翌日、白蛇に恐れをなして姿を消した蟾蜍の像が巽屋にひょっこり現れる。甚五郎はその像の腹に「嘉兵衛さんへ」と銘を彫り、改めて贈り直して一件落着となる。そこに、左手のない女がこの先の宿場で目撃されたとの情報が入った。甚五郎と伊蔵は次の宿場に向かって出発する。

2. 虚実中央龍(きよじつなかばののぼりりゅう)

- (1)ひねくれ者でいつも他人を見下している奈良井宿の旅籠「芥子(からし)屋」の主人、七兵衛はある日、宿場の裏にある鷺沢池のほとりに「今月晦日この池より竜昇らんずるなり」という立札を立てた。立札を見た人々が騙されて、この立札は本物か偽物かと真剣に議論しているのを見て、七兵衛は「馬鹿者どもめ、竜などいるはずもないのに、俺の偽札に騙されておるわ」とほくそ笑む。

- (2)そこに甚五郎と伊蔵がやってきて芥子屋に宿を取る。右腕がない甚五郎のことを七兵衛が見下す態度を取ったので、甚五郎は少しだけムツとする。甚五郎が『池のほとりの立札はなんなんだ?』と尋ねると七兵衛はとぼけるが、あとで甚五郎はこっそり伊蔵に「大福帳に書いた七兵衛の字が、まるであの立札と同じだ。ありやあ七兵衛が仕掛けた狂言だぜ。面白そうだから、少しからかってやろう」とささやく。
- (3)甚五郎と伊蔵は芥子屋に留まり、「左手のない女」の噂話を集めるが手掛かりがない。その間にも池のほとりの立札はどんどん話題になっていく。七兵衛は喜ぶが、一方で騒ぎが予想以上に大きくなってきたのでだんだん恐ろしくなってくる。甚五郎と伊蔵はとぼけて「竜はきっと出るに違いない」と言い、「竜なんて出るはずがありませんよ」と言う七兵衛をわざとけしかけて議論する。甚五郎に言いくるめられて、七兵衛もだんだんと、竜が出てくるのではないかという気になってくる。
- (4)甚五郎は芥子屋に何日か逗留するうち、徐々に七兵衛の性格を理解してきた。七兵衛はひねくれ者の小悪党だが、心根は悪い人間ではない。甚五郎は七兵衛を少しだけ懲らしめて改心させてやろうと考える。
- それで、竜が昇るとされた晦日の六日前、甚五郎は「納屋を貸してくれ」と言って伊蔵と二人で納屋にこもる。晦日の前日の夕方に二人は納屋から出てくるが、中に何があるのかは絶対に見せてくれなかった。この間、ずっと木を削る音がしていたのに、翌朝、納屋の中はからっぽだった。
- (5)晦日の当日になると、朝から池の周りが見物客でごった返し、物売りたちが団子や酒を売ったりして大賑わいだ。芥子屋をはじめ奈良井宿の旅籠屋もすべて満員で、宿場町の者たちは「竜が毎日昇ってくれば商売繁盛でいいのにねえ」などと言っている。それでもなかなか竜は昇らず、日が傾きはじめて野次馬たちも飽きてきた頃、甚五郎が「来るぜ」と小声で呟く。その声と共に竜が池から昇り、天空に消えていった。
- (6)自分のいたずらが本当になってしまい、愕然とする七兵衛。甚五郎は「昇る、昇ると毎日思っていると、いつの間にかそれが本当になっちゃうもんだ。日頃の心持ちってえのは怖えもんだな」と声をかける。七兵衛は、これからは人を見下して馬鹿にするのを止めて、正直に生きようと心の中で決意する。その様子を見て甚五郎と伊蔵はにっこりと笑い、正体を明かさぬまま次の宿に向かって出発する。

3. 傀儡一分魂(くぐつにもいちぶのたましい)

- (1)伊蔵が「これまでずっと、宿場で噂話の聞き込みをしている間に、お美弥さんが先に進んでしまっています。お美弥さんが中山道を進んでいることはもう間違いないので、いっそ追い抜いてしまってもいいから、聞き込みはほどほどにして先を急ぎ、とにかくお美弥さんに追いつきましょう」と提案する。甚五郎もそれに同意し、垂井宿まで来たところで、ついに「今朝、近所で左手のない女を見かけた」という証言に出会う。
- (2)女を見かけたという場所の付近を甚五郎が捜し回っていると美弥の姿があった。美弥は最初嬉しそうな顔をして、「あんた！」と叫んで甚五郎に駆け寄ろうとするが、いきなり振り返っ

て逃げ出す。追いかける甚五郎が「なんで逃げるんだ美弥！」と呼びかけると、美弥は「私だって逃げたくないわよ！ だけど弁天様が逃げろと言うから！」「ちょっと待て、弁天様がなんでおめえに逃げろなんて言うんだ」「この身体は、私の身体だけど私の身体じゃないのよ。あんたが彫った木像に魂を埋め込まれてから……」「なんだって！？」「あんた……、ごめんよ。弁天様の手を必死に振りほどいたけど、また魂を掴まれちゃったわ……もう、体が勝手に動きはじめてる。これ以上話ができないね」美弥はそう言い残すと、いきなり人間離れした脚力で跳躍し、獣のように藪の中に駆けこんで姿を消してしまった。

(3) その日の夜、旅籠で甚五郎は呆然としていた。「お美弥の魂と弁天様に、一体何の関わりがあるんだ」

甚五郎は伊蔵に弁天様との取引のあらましを語る。「俺は弁天様と取引をしてお香を授かり、弁天の秘術を手に入れた。俺は寛永寺の水呑みの龍を彫り上げたあと、そのお礼として弁天様の像を彫り、琵琶湖の竹生島の岩窟に奉納した。取引はそれですべておしまい、弁天様との間に貸し借りはないし、像は全身全霊を込めて彫ったんだ。間違いねえ、その時の俺の力ではあれ以上の傑作は惚れねえ。恨みを買うような仕事は絶対してねえのに、なんで弁天様が、お美弥の魂を俺の彫った木像に押し込むなんていう酷い仕打ちをするんだ」「とにかく、明日またお美弥の逃げた方向を捜すぞ」

(4) その日の夜中、甚五郎は宿賃を伊蔵の枕元に置いてこっそりと旅籠を出る。だが、甚五郎が出て行くと伊蔵はすぐに目を覚まし「そうはいかねえぜ、甚五郎さん。どうせあんた、竹生島に行って弁天様と会って話をするつもりなんだろ」とつぶやき、自分も荷物をまとめて宿賃を置き、続いて宿を出る。

(5) 伊蔵は速足で竹生島に先回りし、島の港に甚五郎がやってくるのを待ち構えた。そして、山の中に入っていき甚五郎の後をつけ、弁天像を奉納した岩窟のありかを突き止める。甚五郎は弁天像の両脇にろうそくを立てて弁天のお香を焚いたが、その様子を岩窟の入り口から盗み見ていた伊蔵は像の顔を見て愕然とする。「なんでえ、あの弁天様の像、お美弥さんとまるで生き写しじゃねえか！」

4. 怨憎竹生島(おんぞうちくぶじま)

(1) 甚五郎が弁天の陀羅尼を七回唱えると、弁天様の像が動き出した。「おい、お美弥の魂が俺の彫った木像に入ったのはてめえの仕業なのか？」と問い詰める甚五郎に、弁天様は「人間ごときが神に向かって、ずいぶんと思いが上がった台詞を吐くものじゃ。雷を落としてやろうか」と凄む。「おう。落としてみやがれ。こちとら死ぬのは怖くねえ。早く殺してほしいくれえだ。それよりもお美弥の魂だ。一体どういう魂胆であんなことをした。いまずぐあいつを黄泉の国に送ってやってくれ」「嫌じゃ」「なぜじゃ。わけがわからぬ」「嫌なものは嫌なのじゃ」と激しい問答を始める二人。

(2) 二人の押し問答を陰で見ていた伊蔵は、弁天様は甚五郎に惚れているのではないかと感じる。だが甚五郎は、弁天様の怒りの理由についての的外れなことを言い続け、しまいには「よくわからねえが、怒らせちゃったのなら俺が悪かった。とにかく謝る」と頭を下げた。

それで弁天様の怒りは頂点に達し、激昂して怒鳴りつける。「甚五郎！ わらわは、芸事に身命を捧げるそなたの純粋な心を憎からず思い、我が神通力をそなたに授けてやったのじゃぞ！ それなのに、この顔！ 己が女房の姿に似せてわらわの像を彫るとは、なんたる仕打ちじゃ！ ……ええい口惜しや！ 憎らしや甚五郎」な……そんなことで？」「そんなことじゃと！ やはり、おぬしは何一つわかっておらぬ！」「俺はただ、この世で一番美しいと思う形を彫っただけだ。それがあんたの願いでもあったろう。それなのに、なんで文句を言われにやならねえんだ」「ああ腹立たし！ もうよい甚五郎。わらわはそなたに地獄の責め苦を与えることにした。教えてやろう……そなたの女房を流行り病に罹らせ、命を奪ったのはわらわの力じゃ！」「なんだと！？」

- (3)「神であるわらわの姿を、たかが人間に過ぎない己の女房に似せて彫るなど思い上がりも甚だしいわ！ それなのに甚五郎、そなたはあろうことか……」「……ん？」「死にゆく女房の姿が美しいなどと言い出して、その姿をまた彫り始めるとは、どういうつもりじゃ！ しかもそれが、わらわのために彫ったこの姿よりも、ずっと魂のこもった最高の出来であるという。ええい、わらわを愚弄するのもいい加減にせよ！」「い……いや、そんなつもりはねえ！ おれはただ、その時その時で自分の一番の彫り物を作ろうと挑んでいるだけなんだ！ 昨日より今日、今日より明日……自分の彫ったものが上手くなることを目指さねえで、何が大工だ？ まあたしかに、いまのところあの像の出来は、俺の人生で一番だ。俺は今でもあれを超えられてねえ。だがそれは、別に弁天様、あんたを馬鹿にするつもりなんて一つもなくて、だいたい、あんたの像がお美弥に似ちまったのだから、それはたまたまで、俺は最初からそんなつもりでは……」「知らぬ！ とにかくそなたは、己の女房に似せてわらわの像を彫った。それでわらわは腹を立て、そなたの女房の命を奪った。それなのに甚五郎、そなたは己の女房の死に際にあろうことか、わらわの像を超える像を彫った。……人間ごときにここまで酷い辱めを受けるとは、神としてなんたる名折れ……かくなる上は甚五郎、そなたに地獄の責め苦を味わわせねば、わらわも意地が立たぬぞえ！」「お、おい、ちょっと待ってくれよ……ってことはよ……お美弥が死んだのも、死んだ後も成仏できねえで木像の中に閉じ込められてんのも……全部俺のせいってことかよ……」「そうじゃ！ すべては甚五郎、そなたがわらわの事を愚弄したが故のこと！ すべて、そなたの咎じゃ！」「なんだよそれ……お美弥……お美弥……俺は……」そのままその場に突っ伏して慟哭する甚五郎。
- (4)「ふん。あの木像を殺せるもんなら、殺してみるがいい。そうすれば、そなたの女房の魂も依り代を失って、黄泉の国に行けるだろうさ。だが、あの女の魂はわらわの手の内にあることを忘れるでないぞ。逃げて逃げて逃げ続けて、もう二度と、そなたに会わせてなどなるものか。そなたの寿命が尽きてもなお、永遠に冷たい木像の中に閉じ込め続けてやるわ！」弁天様の声を聞いた甚五郎はむくりと起き上がると、うつむいたまま生氣のない声で「ああ、お美弥……すまねえ……俺のせいで、全部俺のせいでおめえは……」と呟き、とぼとぼと幽鬼のように外に出ていった。
- (5)伊蔵は甚五郎の後を追おうとするが、背後から弁天様に呼び止められる。「さっきから、気づいてないとも思ったかえ？ 他人の話を盗み聞きするとは、根性のねじくれた男だね」

それで伊蔵も弁天様の前に進み出てひざまずいた。「甚五郎を追って、優しい言葉でもかけてやるつもりかえ？ そんなものがあの男に響くとは思えないがの。ひよっとしたらもう、その崖から身投げしているかもしれぬわ」「そんなことしませんよ。甚五郎さんを舐めないでほしい」「若造がよう吠えよる」「あなたは、甚五郎さんがどれだけお美弥さんのことを思っているかが分かってない。甚五郎さんは、お美弥さんのためならどんな地獄を見ようが、絶対に耐え抜いてやり遂げるお人だ」「ずいぶんとあの男を買いかぶっておるようじゃな。幽霊のようなさっきの顔を見て、よくもそんなことを言えるものじゃ」

- (6)「いや、弁天様。あなたも心のどこかで、甚五郎さんがこの責め苦を乗り越えるのを願っているのでしょうか」「……はあ？」「わかりますよ。あんたは甚五郎さんに心底惚れこんじまっている。それは男と女の情とか、そんな生臭いもんじゃねえ。自分じゃ気づいてないけど、最初からあんたは甚五郎さんのまっすぐな魂に、どうしようもなく惹かれちまっているんだ。それで、甚五郎さんがこの先どんな人生を歩んで、何を彫っていくのかが楽しみで仕方がなくなっている」「馬鹿なことを申すな。わらわにとっては、あの男の気組みが萎えて、何も彫れなくなつて、どこかで野たれ死ぬのが一番だえ」「本当に、そう思っていますか？」「……………」
- (7) 黙りこくる弁天様に一礼すると、伊蔵は「大丈夫。甚五郎さんには神田の政五郎親方と、気のいい大工仲間と、そして俺がいる。きっと何とかしてみせます。まあ一丁、見ていてくださいえよ」と堂々と言い残して岩窟を去る。

5. 妻飛脚東往来(つまびきやくあづまおうらい)

- (1) 弁天様に勢いで啖呵を切ったのはいいものの、伊蔵は甚五郎の姿を見つけれず焦る。まさか琵琶湖に身投げしていないだろうと冷や冷やしながら船頭に聞き込みをすると、右手が義手の男が船に乗って長浜に向かったとのことで、伊蔵はひとまず胸をなでおろす。
- (2) 長浜から甚五郎がどちらに向かったのかは分からない。きっと江戸に向かったのだろうと当たりをつけて伊蔵が中山道を東に向かうと、関ヶ原の手前の柏原宿で人だかりができていた。何が起こったのかと聞くと、旅人の行き倒れだという。伊蔵が行ってみるとそれは甚五郎だった。空腹で倒れたという甚五郎に、伊蔵は無理矢理飯を食わせる。
- (3) それから二人は中山道を江戸に向かって旅したが、甚五郎は打ちひしがれて何度も死のうとする。お美弥の像を彫るという誓いを思い出せと伊蔵が呼びかけるが、その声は甚五郎の心には響かない。下諏訪宿まで着いたところで、いつまでもウジウジしている甚五郎にとうとう伊蔵の堪忍袋の緒が切れ、「見損なったぜ甚五郎さん！ あんたはもっと芯の強い方だと思ってた！」と怒鳴りつけて押し問答する。すると、そこに突然棟梁の政五郎が現れ、甚五郎を叱りつける。
- (4) なぜ政五郎がこんなところに？と驚く甚五郎に、美弥が飛脚で政五郎のもとに文を送ってきたと言って手紙を見せる。そこには走り書きで、弁天の呪縛を少しの間だけ振りほどくことができたので、急いで文を書き飛脚に託したという事情と、きっと甚五郎は中山道を江戸に向かいながら罪の意識に苦しんでいるだろうから、政五郎が助けてやってくれという願いが記されていた。

(5)その手紙を見て甚五郎は泣き崩れ、改めて美弥を見つけ出して殺すことを決意する。

以上